

—会員寄稿—

アラスカ北極圏への道

北大・低温研 児玉裕二

永久凍土地帯の融雪水流出を調査するために、今年4月末から約40日間、アラスカ北極圏のトゥリック湖畔に滞在した。観測を行ったのは、トゥリック湖のキャンプ地から10マイル程離れた、アラスカ大学の実験流域であるイムナバット・クリークである。トゥリック湖は、ブルックス山地の北側に位置し、アラスカ州の内陸都市フェアバンクス市からおよそ370マイル北にある。ここへ北回帰線を通りながら陸路で赴いたので、その時見た事、感じた事を綴ってみたいと思う。

4月28日に成田を立ち、アンカレッジを経由してフェアバンクス空港には同じ日に着いた。アラスカ大学のケーン教授をはじめ、昨年一諸に仕事をした仲間達が出迎えてくれた。8年間学生時代を過ごしたフェアバンクスの街並みはあまり変化がないが、ここに住んでいた時、偶に帰日して忙しい日々を過ごしてから戻ってきた時に感じた安堵感はあまり感じられなかった。フェアバンクスが“遠くにありて思うべき”故郷になりつつあるのかと思う。

トゥリック湖への出発は5月3日となった。フェアバンクス市からスティスハイウェイ、エリオットハイウェイ、それからダルトンハイウェイをつないでトゥリック湖に到る。北極海のプルードベイの石油地帯から、あの記憶にも新しいタンカー事故が起きたヴァルディーズまで石油パイプラインが通っている。ダルトンハイウェイはそのパイプライン建設のために設けられた道で、今はプルードベイへの唯一の陸路である。トゥリック湖までは、約10時間のドライブである。

朝9時過ぎに、6人が乗れるトラックに荷物を満載して出発する。一諸に乗ったのは、ケーン教授の下で博士号を取得しようとしているラリー、水質の研究をしている院生のブルース、低温研の石川助教授、それに私である。ラリーは、アイリッシュコーヒー（コーヒーにウィスキーとミルクを混ぜて甘くしたようなもの）を飲みながら、ジョークを連発する。彼の話の一つを紹介すると……。アラスカにはアメリカ本土から移住して来る人が多い。多くの人々が移住して来た最初がゴールドラッシュの時で、最近ではパイプラインの建設の時である。アラスカに来て日の浅い者をCheechakoと呼ぶ。永らく住んでアラスカナイズされた人をSourdoughと呼ぶ。Sourdoughになる条件に3つあると言う。その一つはちょっとここでは紹介できないような内容だが、他の2つは灰色熊を撃つ事とユーコン河に小便する事だという。

そうこうしているうちにユーコン河にさしかかった。橋上で停車してはいけないという看板がかかっていたが、ラリーは何ともないよと言って、私達が乗って来たトラックを橋の中間あたりで停めた。ユーコン河は固く氷にとざされていて真っ白だ。河幅は300mくらいで実に雄大だ。テレビで何回か「大解氷」が特集されたので見た事があるが、この氷が一週に動くのだろうかと思いたくなる。やがてラリーが小便をするので、私も並んでした。すると欄干に設置してあったスピーカから“もうSourdoughになれたでしょう。早く車を橋上から移動させなさい”と放送があった。ラリーの話は余程有名らしい事が解った。

ダルトンハイウェイの入口の所に速度制限の標識が立ててあった。最高速度は時速45マイルと指示してある。このハイウェイは全部砂利道で時速45マイル以上出せる所はほとんどないのだが……。スピードを出し過ぎるとパンクや故障が怖い。故障しても修理する所はまず無い。私達のトラックにも2コのスペアタイ



図1 パイプラインとダルトンハイウェイ

ヤが積んである。面白いのはその丸い標識の下に“NEXT 416 MILES”と表示してある。さすがアラスカだ
 と思う。函館から稚内くらいまでの距離の道路の速度制限が一つの標識ですませてあった。

フェアバンクスから出発して4時間半経った頃、66°33′の緯度線を越えた。陸路で北極圏へ踏み込んだのは
 初めてであった。ここから北の地においては、理想的には、太陽が沈まない日あるいは太陽が昇ってこない
 日が一日以上あるはずである。地球の自転軸が公転面に対して垂直でない事を新めて考える。

私達のトラックは、森林限界の上に出たり、下に降りたりして、だんだんとブルックス山地の懐の中に入っ
 て行く。残雪も少しずつ見られるようになった。立木の背の高さも低くなり、その数も少くなる。ある黒ト
 ウヒの前に大きな看板が立ててあった。よく見ると“アメリカ大陸で一番北に生息する黒トウヒ”と書いて
 ある。名誉ある木であった。

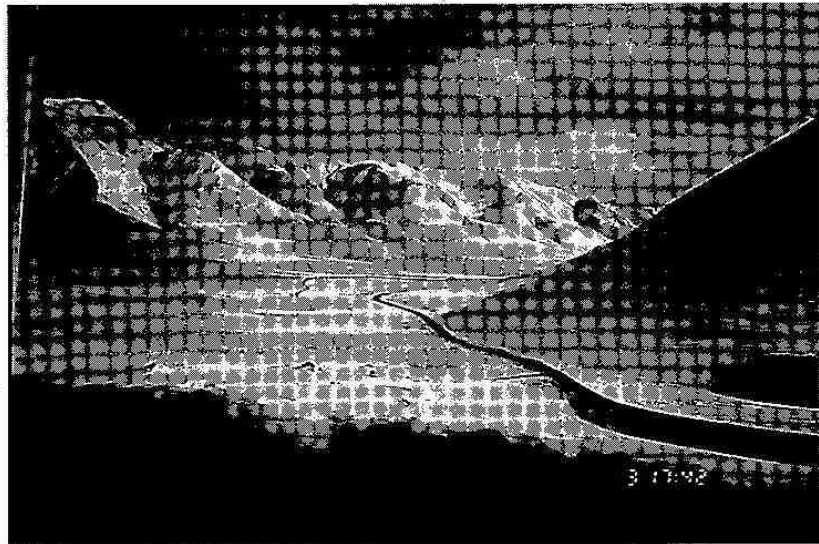


写真1 雪の中のダルトンハイウェイとパイプライン

急な坂を登りきると広い台地に出た。景色は一変して一面雪の世界である。150メートル程の坂の下には、
 今まさに春になろうとしていたのに、ここは全く冬である。立木は全くない。前方には雪をいただいたブルッ
 クス山地の山なみが見える。そこへ一本の茶色いダルトンハイウェイと、銀色のパイプラインが曲がりくねっ
 て伸びている。宇宙船から地球をみた宇宙飛行士達の多くは、青白く光る美しい地球を見て“神”の存在を
 思ったそうである。“こんな美しい地球は神以外には創造しえない”と。ここでの景色を見ていると、神の存
 在を信じてもいいように思えてくる。しかし、人間の英和を集めて建設されたパイプラインと共にこの雄大
 な自然を見ると、人間の成せる業にも驚嘆せざるを得ない。地球を地球の外からみて神の存在を思った宇宙
 飛行士達は、自分達が人間の英知によって地球の外にいるという事実をその時どう感じただろうか。

途中、いろいろな動物を見た。ムース、灰色熊、キャリブー、うさぎ、北極きつね、ふくろう、雷鳥、ガ
 ン、カモ等々。ラリーは、このダルトンハイウェイに沿って新しい食物連鎖に近いものができつつあると次
 のような話をしてくれた。ダルトンハイウェイは、砂利道なので、プルードベイへの荷物運搬用の大型トレー
 ラーが砂ぼこりを舞い上げて頻繁に通る。砂ぼこりは道端の雪のアルベードを下げ、融雪が促進される。雪

が早く消えると、植物が早く芽を出し、それを食べるために、雷鳥などが集まる。それらが時々交通事故に遭う。その死骸を食べに、カラス、ふくろう、キツネなどが集まるという。動物達の中には、人間の侵略に対しても、すばやく適応してたくましく生きのびているものもいるという。

動物を探して車窓の外を見ていて、よく動物と見間違えたのは、ビニール袋であった。自然の腐敗分解の力よりもはるかに強い科学産物である。科学は人間の疑問の解消に大きな役割を果たしてきたが、その産物の全てが全面的に人間に利益を与えていない。疑問の解消に性急な余り、副次的な影響を考慮しないで生産された物が多々ある。アラスカ北極圏の大自然の中にビニール袋がゴミとして点在するのは興ざめであった。核廃棄物だけは将来このビニール袋のようになってほしくないものである。

ダルトンハイウェイの最高点であるアティガン峠やその南側、北側にワイオミングゲージが設置してあった。ワイオミングゲージとは、大きなじょ炭のついた雨雪量計で、中には温度が低くなっても凍らない冷却



写真2 ワイオミングゲージとラリー

水が入っていて、その水位変化から降水量を測るようになっている。ダルトンハイウェイのワイオミングゲージは、ケーン教授らが維持管理していた。このゲージによると、昨年10月末から今年5月初めまでの降水量は、峠の南側では14 cm、峠で12 cm、北側で6 cmであった。ブルックス山地には、氷河が少く、又、その北側にはほとんど氷河がない事を裏づけている。

ダルトンハイウェイからトゥリック湖畔のキャンプ地への分岐点までは、何事もなく夕方7時半頃到着した。しかし、キャンプ地にもう300 mという所で、トラックが測溝に落ちた。吹き溜りのために路肩が見えなかったのだった。まだ明るいので救出しようとして3時間あまり悪戦苦闘したが、夜11時過ぎになって寒くなってきたのでその日はギブアップ。軽い夕食を取ってすぐにベッドへ。長い一日であった。